

岩手県文化財調査報告書第六十五集

岩手県「歴史の道」調査報告

宮古街道

岩手県教育委員会

岩手県「歴史の道」調査報告

宮古街道

序

地域開発に伴う交通網の整備は、現代社会の進歩発展から生ずる必然的な要請であり、県内においても日々近代的な道路の建設が各所で行われ、私達の生活は一段と便利になり多大の恩恵を受けております。

しかしその反面、本県歴史を知る上にかわめて重要な意味をもつ道・河川などの交通路に残る並木道・道標・一里塚などの交通遺跡が次第にその姿を消しております。このような現状を重視し、本県では昭和五十一年度から国庫補助を受け「歴史の道」を調査してまいりました。

本報告書は、本年度に調査しました五街道のうち、盛岡城下の笹屋町地内で遠野街道から分岐して、薬川・区界峠を越え閉伊川沿いに宮古にいたる「宮古街道」について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集めたものであります。

本県が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いであります。

なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ、諸資料を提供して下さった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十六年三月

岩手県教育委員会

教育長 新 里

盈

例 言

一、本書は歴史の道「宮古街道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。

(1) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(2) 調査した事項

(ア) 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

(イ) 江戸時代の国界・藩界及び地名。

三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員 草間 俊一 岩手大学教授

専門調査員 細井 計 岩手大学教授

専門調査員 吉田 義昭 盛岡市教委文化財専門員

地区調査員(盛岡市) 菊池 常雄 滝沢村文化財調査員

地区調査員(川井村) 芳門 留次郎 川井村文化財調査員

地区調査員(新里村) 山領 洗馬 新里村文化財調査委員長

地区調査員(宮古市) 大黒 民男 宮古市文化財保護審議会委員

補助員 高橋 哲郎 岩手大学文部技官

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、専門調査員吉田義昭が執筆し、文化課が編集にあたった。

目次

序 例言

岩手県教育委員会教育長 新里 盈

一、宮古街道の概要	8
二、街道の里程	12
二、一里塚・道の幅員	13
四、沿道の現状と保存状況	17
一、盛岡市	17
二、川井村	20
三、新里村	21
四、宮古市	23
五、沿道に残る主な文化財	25
一、盛岡市	25
二、川井村	26
三、新里村	27
四、宮古市	28
六、沿道に沿った公開施設	30
写真	31
地図	47

插图・表目次

第1図	江戸時代の宮古街道概要図	9
第2図	「南部領道程記」宮古街道部分 正保四年（一六四七）書上	9
第3図	御城下より宮古迄里数書上	10
第4図	黒田村・宮古村屋敷図（部分）元禄五年	25
第1表	宮古街道駅所区間里程一覽	12
第2表	盛岡市 記念物（史跡）指定調査	13
第3表	高畑一里塚・築川一里塚規模比較表	14

一、宮古街道の概要

近世における南部盛岡藩、十万石の居城は盛岡である。

この盛岡城下と領内東海岸の主要港の一つ宮古を結ぶ主幹ルート、これが宮古街道である。この街道は、盛岡を起点として南北に発達した北上山地の連々たる準平原をほぼ真東に傾斜を越え深谷をぬって横断している。この往還は盛岡領内でも屈指の難所続きの道筋である。普通この往來は、泊三日の行程である。従つてそのルートについても古来、幾筋かの先人の開拓した足跡が語り伝えられており、こと宮古街道に關したその開発と改修土木工事の歴史は、汗と血そして涙と、農民・樵も派生した苦難が繰り返された記録だといつても過言ではない。

○ 宮古街道は北上山地兜明神岳（○〇七m）の南側にある区界峠（標高七五二m）一分水嶺を境にして、西方は盛岡市域で北上川水系に属す栗川に沿う道筋である。

また、東側は兜明神岳の南西に広がる区界高原・田代放牧地に水源を発して東流する閉伊川水系に属し、この曲折して流れる閉伊川の溪谷を難所続きの道は河谷の右岸そして左岸と場所を選んで渡渉しまた尾根をつたつて直接太平洋岸の河口に拓けた宮古に至る約、〇〇余村往還である。

然るに、前述のとおり、複雑な地形の北上山地のなかで、特に東北地方における北上山地特有の隆起準平原「平頂塞」を巧に活かした独特の道筋が拓けていたのである。その中でも、文政六年（一八二三）江戸の豪商藤田武兵衛によって開発された史実上明確なルートとして知られる松草（川井村）から刈原（新里村）の新道区間（第一回参照）は、多くの箇所では従来の道筋を放棄した新道で、平頂塞を往來する典型的な事例であった。このように、宮

古への道は街道としては他に例を見ない大きな特徴を有している。

しかし、この街道はまたたき機能とその性格は美態として非能率的な人間の背で運搬するが、制約された質斌の物資を牛によって搬送されたに止まり、完全に街道として宿駅、そして駄送、人馬の往來が容易であつて、経済的効率のよい道筋に整備されたのは江戸後期と考えざるを得ないものがある。即ち、享保期・天明期の街道改修事業、また、宝暦八年（一七七八）前後における有名な牧庵羅牛相高によって開発改修された道筋についても未だ険阻な山道、危険な道筋で川涉りの場所が多く指摘され、以後も再三にわたる道筋の改変を含めた改修土木工事が繰り返されてきたのである。

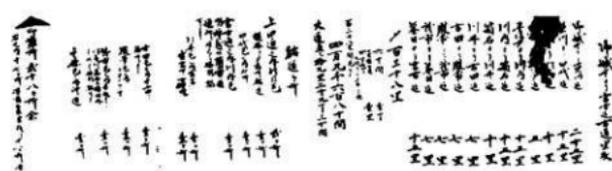
特に、文化年中以降、異國船の領海出没に伴ない北地警衛と領内沿岸の海防強化策の一環として台場の整備、そして城下からの軍事上の施策的な道路の整備がはかられたことにもよるが、斯る大規模かつ再三の改修工事例は領内における他の街道には見られない宮古街道についての配慮である。

以上によつて宮古街道については、筋の往還だけではなく、基本的には二ルート存在することが資料によつて記録することが出来る。この概要、主な経山地を記すと、

経路

資料

- (1) 御城下→上小路→砂溜→八木田→高畑→大倉峠
 →正保四年南部領道程
 ・粟川・区界・松草・半津江・川内・箱石・古田・隈部→茂市→暮日→花原市→根城→田頭→千徳・宮古（第一回一）
 以上盛岡市中央公民館蔵
- (2) 御城下→砂溜→宇津野→川目→宇賀沢→水沢→曾科田→鑿川・区界・松草・半津江・川内→箱石→古田→隈部→茂市→暮日→花原市
 以上盛岡市中央公民館蔵
 ・宮古街道図巻一（天保）
 ・宮古街道図巻二（文政）
 ・若手學立圖書館蔵



第3図 御城下より宮古迄里数書上

(3) 御城下→砂溜→津野→
 前ヶ嶺→川目→宇曾沢→
 曾利田→水沢→栗川→飛
 鳥加倉沢→区界→松草沢
 →遠部→頭→長松→頭→菊
 屋→尾→鳥居→前→和井内
 →千徳→宮古(第1図3)

(4) 御城下→山岸→淺岸呼石
 →元宿→錢掛→笹ノ平→
 カヤノ→釜津田→大川
 浅内→上右芸→山代→山
 口→宮古

部分的な改修道を除く上、要道は以上のようになる。
 なお、明治十一年(同九年調査資料)岩手郡岩手縣管
 轄地誌「岩手郡及び閉伊郡之項」によると、

宮古街道 縣道三等二屬ス
 郡ノ西岩手郡境ヨリ入り田代、門馬、平

津戸、川内、夏屋、鈴久名、箱竹、片栗、
 川井、古田、服部、茂市、藤目、花原市、
 老木、田鎖、千徳ノ諸村ヲ経テ郡ノ東宮
 古港ニ達ス、

長式拾一里志拾四町式拾四間、幅広處五

間余、狹處二尺、

宮古街道 縣道三等二屬ス

郡ノ北岩手郡境ヨリ入り釜津田、門、穴沢、巖崎、二升石、尾額、
 岩泉、乙茂、栗野、中里、中島ノ諸村ヲ経テ小本村ニテ浜街道
 二合ス

長八里式拾七町七間、幅広處三間、狹處二尺、大ヨリ撰待、
 乙部、田老、崎山、崎嶽ヶ崎、浦嶽ヶ崎ノ諸村ヲ亙リ宮古港ニ
 達ス

長八里式拾八町四拾七間、幅広處二間、狹處七間
 二道長合計志拾七里志拾四町老拾四間
 (以上閉伊郡地誌記事)

宮古街道 縣道三等二屬ス

縣下東中野村字乾屋町ニテ釜石街道ヨリ東北二分岐シ又東南二
 折レ川目村、露川村ヲ経テ郡ノ東位閉伊郡ニ通ス
 長四里零九町二拾零間、幅広處四間、狹處三間

宮古街道 縣道三等二屬ス

縣下仁王村字本町ニテ南蒲街道ヨリ東北二分岐シ三河、山岸、
 上米内、川又、日戸、藪川ノ六町ヲ経テ閉伊郡ニ通ス
 長志拾式里志拾五町四拾七間、幅広處四間、狹處貳間
 (以上岩手郡誌記事)

と、前期(2)項に概サルトと、新規縣下仁王村字本町から岩手郡三ツ別村→
 山岸→上米内→川又、日戸→藪川→閉伊郡釜津田村、門、穴沢、巖崎、二升
 石、尾額、岩泉、そして乙茂、栗野、中里、中島の諸村を經て小本村に至る

道(旧小本街道)。それから浜街道によって宮古町に至るルートを宮古街道に設定している。この道筋は江戸期における宮古街道としては位置付けのない往還である。

藩政時代における経済流通ルートとしての宮古街道について、その存在は重要であることは諸書で紹介されているところであるが、実体としてその往還は整備不良の時代が非常に長かった。街道補修について文獻(南部藩家老席日誌「雜書」)上での初見は承応二年九月二日付

一、盛岡一閉伊宮古迄、道橋繕い奉行吉岡平左エ門・葛西庄兵衛同心二人、中略……何茂今日被遣云々

と、その維持に当っている。この道筋は正保図に見るルートであることは論を待たない。川井村郷土誌上巻(川井村昭和37年刊)によれば寛永一八年(一六四一)川井運動の閉伊街道の改修記事が記されているがその詳細は不詳である。また同誌に享保九年(一七二四)四月、宮古往來戸川通(閉伊川通)道普請」文書があつて、

寛

川井村 古内

箱石村 軒原 五郎作

右者此度宮古往來戸川通道普請被仰付候依之右向人江普請中人用入足諸人方共引請相動候様申付候間諸百姓芳二不成様心を付費私曲等堅不仕勿論普請念入候様可被仰付候若御藏給所百姓共指圖相背普請不働いたす者於有之ハ御代官急度可被違吟味候 以上

(享保九年)

辰四月

四戸 長五右衛門殿

御勘定所 勘定所
御元ノ所 元ノ

美濃部 作右衛門殿

とあつて、大規模な普請のあつたことが判明する。しかし、運次整備された街道ではあつたが、前述の正保及び元禄松園注記によると「此処大難所宮中牛馬不通」築川村大倉崎・川井村地内辨山・通称は大神」の箇所もあつて、夫伝馬往來としては難所が多く、牛・人力に頼つて駄馬の交通には支障が多かつた。

宝暦八年(一七五八)、大橋通橋野村の林宗寺六世牧庵驛牛(一七〇一七八)は、宮古街道の最大の難所区間である盛岡一平津戸間、十二里半の道路改修に着手している。この事は延べ距離千二百七十間、その内、難所十ヶ所を四十二日間に見つて、沿道七ヶ村民約二千六百人を使役して改修している。

この驛牛相尚の新道路開きくによつて、牛馬による物資の搬送交易も容易になつたとされている(川井村郷土誌豊岡根家所蔵「宮古代官所見分書寛」)。

この道は「五十集の道」と呼び伝えている(富岡儀八「日本の道道」文庫版は「嵐の道」と称している)。だが一方、公道として「大伝馬駅所」を經由しない地方道も根強く利用されたけいせきも顕著であつて、沿線地元の高老連の言によれば南部半方衆によつて開発された往還がある。これは平頂峯を自山に読みとり往來した近道を半方達は持つていて、これを「嵐の道」と呼び、また、閉伊の「鉄の道」としていることである。

本稿は、こうした諸ルートの中から南部領内道程記及び「夫伝馬駄負帳」によつて、公式に位置づけられておる宮古街道馬鞍所を経出する往還、江戸時代中期を中心に利用された前述(1)、に關した街道について報告するものである。

二、街道の里程

宮古街道區卷（江戸後期・岩手県立図書館蔵）の序説に

舊相模南部封城之里法于他自往古因七々數以四十九町爲一里。又、因六七數以四十二町爲一里。或因地以五十二町爲一里其畧区里定法未如其詳也。是故今以四十九町之制爲田舍路六町一里而此爲未嘗做之門元以卅六町爲一里者本朝之道法也。云々……中

第一表 宮古街道區所区間里程一覽（時代別）

略… 御城下正東方
則是赴宮古縣海邊一條

宮古街道區所区間里程一覽		封内實		記		御城下ヨリ宮古街道區所	
區所区間	里程	區所区間	里程	區所区間	里程	區所区間	里程
盛岡—盛岡	三里半	盛岡—盛岡	四里二丁四間	御城下—盛岡	五里	盛岡—盛岡	五里
盛岡—門馬	三里半	田代—門馬	一里四丁四間	田代—門馬	〇里	田代—門馬	〇里
門馬—門馬	三里半	門馬—門馬	一里一丁	門馬—門馬	五里	門馬—門馬	五里
門馬—茂市	七里半	平津—川内	一里一丁	平津—川内	一五里	平津—川内	一五里
茂市—茂市	七里半	川内—川内	二里六丁五間	川内—川内	一五里	川内—川内	一五里
茂市—宮古	四里半	箱石—川井	二里九丁〇間	箱石—川井	一〇里	箱石—川井	一〇里
宮古—宮古	四里半	川井—古田	一里九丁〇間	川井—古田	七里	川井—古田	七里
宮古—宮古	四里半	古田—觀音	一里三丁四九間	古田—觀音	七里	古田—觀音	七里
宮古—宮古	四里半	觀音—茂市	一里八丁六間	觀音—茂市	七里	觀音—茂市	七里
宮古—宮古	四里半	茂市—藤日	一里三丁四八間	茂市—藤日	七里	茂市—藤日	七里
宮古—宮古	四里半	藤日—花原市	一〇丁間	藤日—花原市	五里	藤日—花原市	五里
宮古—宮古	四里半	花原市—根城	一六丁	花原市—根城	五里	花原市—根城	五里
宮古—宮古	四里半	根城—田代	一〇丁二間	根城—田代	五里	根城—田代	五里
宮古—宮古	四里半	田代—千徳	一〇丁二間	田代—千徳	五里	田代—千徳	五里
宮古—宮古	四里半	千徳—宮古	八丁五間	千徳—宮古	五里	千徳—宮古	五里
計	一八里半	計	二八里四丁四間	計	二八里四丁四間	計	二八里四丁四間

額内往還の四十九町一里制、四十二町一里制、また五十町一里の存在を示唆しているが、同書の盛岡御城下から最初の駅所である盛岡までの行程（川日・宇曾沢・水沢経由宮古新街道）は、下四里四町十四間とあってほぼ七里請四十二町制で記されている。

正保四年（一六四七）三月書上「南部道程記」には宮古街道の盛岡城下から宮古までの里程は十八里半と記載されている。

この時代の往還は第一(四)の往還であつて、駅所も盛岡・門馬・茂市、そして宮古だけという途

中僅かに宿駅に過ぎない。

小本助兵衛「宮古出来記」(南部叢書第...冊所収)によれば、旧道往還について、

「宮古出来記」に「寛永十八年、從森岡被仰付禁に付而は、二閉伊の道法相改、七里塚築立中候様に被仰付候。依之、小元助兵衛・船越新左衛門兩人、二閉伊道法相改、四拾式丁を巻里と定め、七里塚の塚を築立中候。宮古御水主丁の橋の左右に標木、寛永二十年に植」

とある。従つて、今次の現地調査によつて確認された一里塚の所在位置の關係についてみると、その区間距離は不定里法である。すくなくも宮古街道については急峻なる山間部の道程には便宜的に増減した里程があつて、里程に定法通りでない点が判明した。従つて通称は七里塚とは云うものの、概には七里塚と極め付けることは不適當と考えられる点がある。

さて、宮古街道は現在の盛岡市鉈屋町地内で熱道盛岡・遠野線(遠野街道)から分岐するが、宮古街道の里程の起点は奥州道中筋の盛岡城下鍛冶町所在の一里塚元標から計測された(奥州道中歴史の道)調査報告書、県文化財調査報告第36集県教育委員会昭53)ことは前述したところである。

正保四年書上「南部領道程記」(泉川正甫著「盛岡砂子」でも鍛冶丁元標からの測定であつて、道中記などの注記に「盛岡或は「御城下」と呼称される里程はすべて右地点のことである。就中、宮古街道について、「宮古街道四巻」(岩手県立図書館本)によると宮古往還第一番目の一里塚について、「一里塚ブナト向 鍛冶丁ヨリ、千九百四十間」とあつて、この宮古街道も明確に鍛冶丁元標から測量されたことが知られる。又、里程は小迫六町一里制による七里地点に、一里塚が位置したこともわかる。

なお、宮古街道については昭和十八年五月、八日付「畿国道二〇八・五(一)となり、同十八年四月、一日付「畿国道に昇格、同四〇年四月、一日付「畿国道、〇六号線に設定告示された。昭和二二、三年のアイオン・カゼリン台風被害による

災害復興に伴なう国道の全面改修の直轄事業が昭和四一年から五二年まで実施されて面目を一新して国道は廃された。この工事に伴ない宮古街道は改廃滅失した箇所が多い。

二、一里塚・道の幅員

宮古街道の路程標としての一里塚は前掲宮古出来記によつて寛永二十年、六町一里制による七里塚の設置記事で明らかである。この一里塚の所在した

第2表 盛岡市 記念物(史跡)文化財指定調査

種別	史跡	所在地	所有者氏名	所有者住所
名称	一里塚(一基)	築山、一四一五地内	藤谷 吉夫	盛岡市築山一三七八
		北 塚(一基)	築山、一一二地内	岡村 保人
一里塚(一基)	曾利田(一基)	栗川六 四〇地内	同 右	同 右
		大倉崎(一里塚)	築山七、三三二大字倉地内	山口 龍尋
高畑(一基)	高畑(一基)	川目二二、一一二地内	佐々木繁蔵	盛岡市川目(高畑)三一四五
		保存状況	山林、雑木林の中に所在する。一部崩れた部分もあるが比較的良好的状態に保存されている。特に築山一里塚、高畑一里塚の二箇所は、二基両方とも完全な形でこのまゝである。	
指定の理由	道路標識としての一里塚の遺存例は極めて少ない。貴重な文化遺産である。特に宮古街道一里塚については、県教育委員会「歴史の道」調査の結果によつても現在このところ盛岡市内所在の一里塚だけが確認されただけで、他は開発行為によつて全部破壊されてしまつてゐる。盛岡市内所在の一里塚について、緊急に保存指定をする必要がある。			

位置については著しく原状が改変されて滅失した一里塚が多く、所在地が明確でない箇所がある。

地名として「塚ノ根」、「塚ノ沢」など字名で、里塚との関連を知る場所もあるが、現地踏査では判然としなかった場所が多い。傍証資料として江戸時代の宮古通代官所及び上田通代官所管内絵図によって知ることが出来るだけである。

今次調査によって宮古街道筋十五箇所の中、その位置が確認出来た一里塚は僅かに

- 八木田・里塚 (南側塚) 一基
- 高畑・里塚 (南塚・北塚) 二基 (一村)
- 大倉峠・里塚 (東塚) 一基
- 曾利山・里塚 (南塚) 一基

第3表 高畑一里塚、薬川一里塚規模比較表

塚名	高畑一里塚	薬川一里塚
立地条件	緩傾斜地・灌木密生地 (道筋は現在廃道)	上に同じ
塚の形状	凹形土壇頭形	上に同じ
両塚頂部距離	一六・七m	一九・一m
両塚裾下内側距離	九・〇m	九・三m
北塚高さ	一・四m	三・〇m
南塚高さ	二・四m	三・〇m
塚幅(南北中線上下)	北塚 六・四m 南塚 七・二m	北塚 〇・二m 南塚 八・七m
塚裾残樹木	原木不詳、現在灌木若干	上に同じ

⑦ 盛岡市教育委員会調査資料による。

薬川・里塚 (南塚・北塚) 二基 (一村)

以上、盛岡市内所在の一里塚が確認出来た。昭和十五年十一月一日付で盛岡市指定文化財となつた。盛岡市「史跡」文化財指定調査によると、前掲(第2表)のとおりである。

以上の一里塚のうち、街道両側一対で二基とも完形で残存している高畑・里塚と薬川一里塚の規模を対比してみると第3表の通りとなる。

この表の結果、奥州道中筋に所在する一里塚の規模よりも一廻り小さく(北上市成田所在一里塚例)、鹿角街道の一里塚規模(鹿角街道一里塚文化財調査報告書第四六集、岩手県教育委員会)の事例より比較的大きいことがわかった。

また、川井村・新里村及び宮古市の一市二村内における宮古街道筋の一里塚については、今回の調査では全くその残存塚は確認出来なかつた。僅かに二、三箇所地点でこの付近が、里塚の遺跡として案内されたにすぎなかつた。不詳の理由は道路工事並びに農地開発によって破壊されたものといふ。

この一市二村内の一里塚については狭隘な閉伊川筋に出来た宮古街道であり、再三にわたる河川の氾濫、特に昭和二十二年、三三年アイオン・カザリン台風被害に遭遇したり、また明治十一年以後における県道新宮古街道の整備事業にはじまつて昭和五十三年度に完成した国道・〇六号線整備改良工事の過程において全く滅失したものである。これは歴史の道調査員の各位から報告されたものである。またこれに関連して、街道筋の道標・追分碑、また鞍牛相馬の道供養碑など記念物も各地で滅失して所在の判明しない物件も若干あった。

なむ宮古水主町(現本町)に所在する宮古元標一里塚は浜街道と一致し、元禄五年書上「御町屋敷表目」改帳(伊香家文書)によつて、御水上町橋詰の御伝馬屋敷である作之尉屋敷と、向側同三郎方屋敷内に一対所在したこ

とが記載されており、塚上に榎木（東塚）、榎樹（西塚）が植えられていることがわかる。

この一里塚が撤去された年代については不明である。

街道の幅員について明確に記述した資料は未見である。従って傍証資料ではあるが、幕末と殆んど変差のない道路管理下にあった明治初期（同九年）の調査資料である「岩手県管轄地誌」岩手郡及び閉伊郡道路之項（岩手県地理係明治十一年稿本）によつてみると、次のようになる。

（東中野村）

釜石街道 村ノ中央字鈍屋町ニテ函館街道ヨリ分岐シ東安庭村ニ通ス

長凡老拾零町四拾四間。平均道幅四間（注、御城下筋の往來）

宮古街道 村ノ西南字鈍屋町ニテ函館街道ヨリ分岐シ川目村ニ通ス

長凡二拾五町五拾八間。幅（一「道巾」以下同じ）平均二間

八木山道 村ノ東部（川目村）字砂溜ニテ宮古街道ヨリ分岐シ川目村ニ通ス
（注、旧宮古街道は砂溜で分岐し、八木田道が旧道となる）

ス

長凡町五十零間 幅平均老間

（新庄村）

盛岡道 川目村ヨリ來り同村ニ通ス

長凡老里二十六町老拾零間

幅平均老間二尺

（川目村）

宮古街道 東中野村ヨリ來り鑿川村ニ通ス

長凡老里二拾三町老拾零間

幅平均四間

（一「新宮古街道・現国道一〇六分線」）

盛岡道

数条ノ細道、村ノ東字高畑二畝リ、條ノ本道トナリ新庄村ニ通ス

長凡六町四拾零間。幅平均二尺、字一反山ニテ又該村ヨリ來り東中野村ニ通ス。長凡、拾零町貳拾八間。幅平均二尺。東中野村ニテハ八木田道ト云フ

（一「旧宮古街道」）

（鑿川村）

宮古街道

幅平均老間

（橋名）（長）（幅）（構造）（該河川名）

古清橋 五間 一間 土造 鑿川

二枚橋 三間四尺 一間 土造 鑿川

桂橋 二間 一間 土造 鑿川

役塚橋 五間 一間 土造 鑿川

古屋敷橋 二間 一間 土造 鑿川

百日木橋 二間 二尺 土造 鑿川

（田代村）

宮古街道

岩手郡鑿川村ヨリ來り本郡門馬村ニ通ス

長二里二十五町一拾七間

幅平均三間

（橋名）（長）（幅）（構造）（該河川）

黒沢橋 四間四尺 老間 土造 閉伊川

柳渡橋 四間二尺 老間 土造 閉伊川

ノノ渡橋 四間二尺 老間 土造 閉伊川

（門馬村）

宮古街道 田代村ヨリ來り平津戸村ニ通ス

長志里零七町零九間。幅平均五尺

(平津戸村)

宮古街道 門馬村ヨリ来リ川内村ニ通ス

長志里零八町零六間。幅平均五尺

(川内村)

宮古街道 平津戸村ヨリ来リ夏屋村ニ通ス

長志里零拾零町貳拾八間。幅平均四尺

(夏屋村)

宮古街道 川内村ヨリ来リ鈴久名村ニ通ス

長貳拾四町貳拾八間。幅平均四尺

(鈴久名村)

宮古街道 夏屋村ヨリ来リ箱石村ニ通ス

長三拾零町零拾八間。幅平均四尺

(箱石村)

宮古街道 鈴久名村ヨリ来リ片栗村ニ通ス

長三拾三町四拾零間。幅平均五尺

(片栗村)

宮古街道 箱石村ヨリ来リ字橋場ニ至テ同村ニ通ス

長貳拾五町五拾一間。幅平均四尺

(川井村)

宮古街道 片栗村ヨリ来リ古田村ニ通ス

長貳里零拾三町。幅平均四尺

(古田村)

宮古街道 川井村ヨリ来リ腹帯村ニ通ス

長志里零二町零拾八間。幅平均四尺

(腹帯村)

宮古街道 古田村ヨリ来リ茂市村ニ通ス

長志里零拾零町一十六間。幅平均五尺

(茂市村)

宮古街道 腹帯村ヨリ来リ袋目村ニ通ス

長志里零貳拾六町二拾零間。幅平均五尺

(袋目村)

宮古街道 茂市村ヨリ来リ花原市村ニ通ス

長志里零五町貳拾三間。幅平均零四尺

(花原市村)

宮古街道 袋目村ヨリ来リ老木村ニ入り再び本村ニ来リ根市村ニ通ス

長貳拾零町貳拾九間。幅平均零四尺

(根市村)

宮古街道 老木村ヨリ来リ千徳村ニ通ス

長貳拾三町零拾零間。幅平均二尺

(千徳村)

宮古街道 根市村ヨリ来リ宮古村ニ通ス

長三拾零町四拾零間。幅平均二間二尺

(宮古街道)

宮古街道 田鎖村ヨリ来リ村ノ南字羽黒坊ニテ宮古街道ニ合ス

長貳町零拾零間。幅二間

(田鎖)

宮古街道 本村南側伊川字羽黒坊ニアリ

田鎖

田鎖

田鎖

四、沿道の現状と保存状況

一、盛岡市

盛岡城下における馬車所並びに領内諸街道の里程元標が設置されていた場所は鍛冶丁（現在盛岡市紺屋町五番、六、七番付近）であった。本来このルートは奥州街道筋であつて、宮古街道に關しては同一路線を左記のようにたどることになる。

即ち、

奥州道中 鍛冶丁から川原丁間

（川原丁角で遠野・宮古街道を分岐する）

遠野街道 鍛冶丁から鈍屋丁間

（鈍屋丁で宮古街道を分岐する）

と、このルートはすべて城下新穀丁惣門を経て郊外に出る。惣門は城下の出入口で改番所として最も重要な施設である。奥州道中はこの惣門を出て約八〇米程で右折し川原丁に出る。そして北上川に架る舟橋を経て南下し花巻から仙台方面へ至るものである。

この川原丁で遠野及び宮古街道が同一路線で奥州道中から分岐して水主丁・鈍屋丁に入り遠野街道となる。水主町は北上川水運の水主屋敷町で鈍屋丁は城下の街道出入口に発達した商店街、そして職人の町であつた。特に米雜穀屋をはじめ酒造屋・糠屋・荒物雜貨屋・五十集倉屋、そして牛馬宿や鍛冶屋など間屋をはじめ雑多な業種が軒を並べていたところである。

この地域は天保五年と明治十七年の盛岡大火の場合にも祟焼を免れた町で、従つて、町並両側には店先こそ近代的に改装された家が多いが未だ充分に往時の様子が伺える建造物が残っている。

（山口村）

宮古街道 宮古村ヨリ米リ字和見ヲ経テ宮古村ニ通シ

長五町零壹間。幅二間

（宮古村）

盛岡街道 字横町ニテ浜街道ヨリ分岐シ山口村ニ通ス

長二町二拾八間。幅二間

再ヒ字八幡前ニ而山口村ヨリ米リ字同所ニテ千徳村ニ通ス

長壹町。幅二間。山口村ニテ宮古街道ト云

岩泉道

字黒田ニテ盛岡街道ヨリ分岐シ山口村ニ通ス

長老拾二町。幅平均壹間

浜街道

磯船村ヨリ米リ浦瀨ケ崎村ニ通ス

長貳拾二町老拾四間。幅四間

字向町ニテ小山田道ヲ本町ニテ浦瀨ケ崎道ヲ横町ニテ盛岡街道

ヲ分岐ス

このように、盛岡城下にはほぼ四間幅、終点の宮古町の主道は幅二間、一部は四間幅と、盛岡城下の場合と殆んど一致する道路幅員である。盛岡から郊外に出て旧道に入つてからは、八木田道は平均壹間一三尺幅、栗川筋で平均一間幅となる。

区界畔の平坦地では三間幅、平津戸筋で平均五尺、川井村片栗から古田駅・茂市にかけては平均四尺乃至五尺幅、最大難所の大倉峠付近及び川井村筋では大半は二乃至四尺幅とあつて道路の幅員は狭小な箇所が多く、如何にも難所の連続であつたことを裏付けているのである。

宮古花原市村付近では一間一尺となる。そして閉伊川下流の平坦地宮古近在においてはじめて二乃至三間と整備されている。

道出来業之図」太山家文書に注記付箋して示されている。上記の図巻には、本報告書の街道を「旧道」と記してある。

これが、2の南無阿弥陀佛弘化二年（一八四五）二月十六日付には明確に「行ハみやこしんみち、左ハみやこみち」とあって、従来の川目部落みちには奥筋も整備されて新宮古街道となつている。この新ルートには明らかに一里塚も建設されて本道として活用されたことを知ることが出来る。

因に「宮古街道図巻」（前掲県立図書館本）にこのサダマリ（砂溜）について

朱筋有大倉嶺山東其阻險半賜之取路也。故從築川井行人勞煩以黃筋爲街道。平也然所々石碎場所

（付箋）

志里塚 プナト向 嚴治丁ヨリ二千九百四十間

（注）「藤川武兵衛家文書」では一里塚所在地を川目村明ヶ畑とある）

壹里塚 宇曾沢一上鼓石

（注）「前掲藤川家文書、川目村明ヶ畑」

八木田一里塚の東塚は半壊の状態が残っている。西塚は塚の土が崩れ取られ基部が僅かに確認出来る状態が残っている。八木山部落から高畑、大倉峠の両一里塚とも完形で、対づ、残っている。盛岡市で文化財指定を行ない保護されている。詳細は前掲したのでここでは省略する。

この区間の街道は比較的良好な状態が残っている。大倉峠の一里塚から東へは急しゅんな坂が続き、街道筋では有数の難所であつて、「宮古街道図巻」

（前掲）付箋に

「朱筋川目通行無之

ミキリ通行大倉峠

ト中候而大坂有之

以馬無不相成中候」

此地從大倉嶺降有長川

曲折渡左右傍流往來故處々小橋

多統雙方山間狹隘最後根色砂

子沢等小邑百是本道丁乙部駅

と、築川水沢口の新宮古街道との合致点までの様子をこのように記している。この大倉峠下の大倉勇家（築川七地割四番）は通称「餅屋」と呼ばれて、往來する人々の休み茶屋或は宿として利用されたと云い伝えている。家屋も往時のまま残っている。

この先は、新宮古街道と同一路線となつて築川駅まで続く、途中に曾利田一里塚（市指定文化財）があるが南塚だけが残っている。北側の塚は農地となつて破壊されている。この付近は築川の流れに添つて岸辺を上流へ進むが仲々の悪路であつたらしい。前掲「宮古街道図巻」にはこの築川から築川一里塚の区間の道筋について

□境迄□道黃筋街道處々小橋

大石等街道流入通行勞煩故

山奥畑朱筋築川下橋園境迄

向西街道早乾開新道請通行

之人馬之安者也

築川駅自是東田代行程凡十六里、町

黄筋街道流洗大石有之歩行

ヨロシカラス朱筋山ト畑ト街道仕度

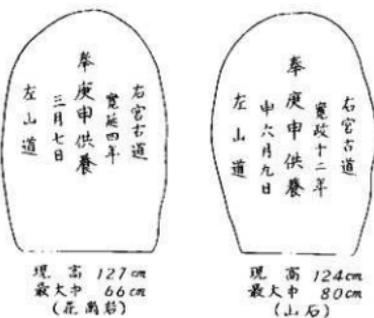
橋數ヶ所即馬乗アヤウク朱筋

本道仕度格別街道筋ヨロシ

壹里塚 柳沢ノ麓ノ下（築川一里塚）

とある。この区間の道筋は旧道、新道とも比較的長く残っている。築川駅跡は開田によって形跡もない。

飛鳥口で本道と左手の飛鳥に至る道を分岐する。直進路は旧本道で、左手飛鳥道は藪倉沢を経て区界に至る文政六年藤田武兵衛開発による新宮古街道である。この場所には左記の道標がある。



この先の街道筋には南部の曲り家も点々残っている。かつては往來の飯宿を兼ねた家もある。熊谷吉夫宅（築川・地割二八番）は通称「餅屋」と称したという。この地方では休み屋を餅屋と呼んだという。

築川一里塚は完全な形状で函塚・対共残っている（市指定文化財）。この付近から区界までは街道の保存状態も良い。急峻を漂ひ跡の登り道である。

二、川井村

築川一里塚地点から凡そ、二〇〇m、川井村境までは築川溪谷に沿って旧道の幅員約、一・五mほどで長く残っており、急峻を登り道が続いている。この登りつめた場所が川井村境である。

関鉄山田線の区界駅の構内西詰と併行して走る国道一〇六号線の防音トンネル出口の場所が街道が寸断されている。

この先、街道は川井村区界付近から門馬口までは農地造成及び国道一〇六号線工事によって旧状を失ないルートは判然としない。

この場所から堂山「兜明神岳（一〇〇五m）」を眼前に眺めることが出来る。街道筋北側に開伊七社の一つ兜明神社が建立されている。廣前信印による近郷崇敬の社であって豊嗣り絵馬を配布している。

この周城の田代付近は太平洋にそそぐ開伊川の水源地帯である。区界スキー場として有名な場所であるが、方、盛岡市少年自然の家も設置されるべく、レクリエーション基地として開発が進んでいるところであるが、戦後、多くの入植者によって酪農・農地開拓が大規模に行なわれた場所で、原状は著しく変っている。

田代地内で、宮古街道から分岐する宮古新道があった。赤九郎沢頭から松草沢を経、刈屋の長松頭から猿舞山、そして堀谷の沢に下る。そこから更に刈屋川西岸を下刈屋に出て高取山北側を迂回して飛沢川沿いに下り最後は谷目の下川原に達するルートである。これが文政六年藤田武兵衛によって開発された新街道（五戸・藤田家文書、岩手県史近世編・交通編）である。

本街道は開伊川筋に沿ってくだる別ルートである。去右一里塚について、前掲「宮古街道図巻」によると、「シヤリ石、志里塚、去右ノ家ノ後、材木鋪キ馬街道」とある。現地屋号去右家裏側を調査したが道筋も一里塚遺構も確認出来なかった。前文の通り、この付近は開伊川水源の湿地帯で排水が悪く

材木を敷きつめ、道としたという理由が理解出来るところである。

松草で分岐する松草沢筋の街道がある。これは大川を経て岩泉方面にいたる北上山地を縦断する道筋として重要な道であった。この道を分岐する松草付近の旧道は国道一〇六号線から外れていて良く残っている。

門馬口の早池峯山登山口の旧道は残っている。ここには門馬口早池峯別当佐々木家の直家も村野入家もそのまま残っている。

文化五年改書上「道中記」(筆者蔵本)によれば、「門馬より平津戸迄一里三丁、盛岡より宮古江行時休、此所(平津戸)馬鞍。宮古々幡之節は門馬迄通し」とある。

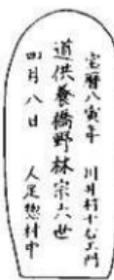
平津戸駅所脇の老里塚は堂ノ前であると前掲「宮古街道図巻」に注記されているが現状では確認出来なかつた。

平津戸から先き焼真木一里塚跡迄の間に大幡難所がある。前掲「宮古街道図巻」注記によると、朱筋(旧道)三十年前大幡通行、下道無之馬無不難相成難所」と駄馬往來の不能とする難所であつた。今回は踏査出来なかつたが旧状の街道筋は残っていると報告されている。

川内から下川井間は殆んど国道一〇六号線上を通過しているため旧道の形跡はなくなっている。また、川内・箱石・川井の馬鞍所の所在した部落も近代化的町並となつて面影は全く失なわれている。

前掲「道中記」によれば、川内往來は嶺山より七里速し。大難所大風雪無之節は嶺山道より」とある。川沿い街道の不便さを伝えている。

閉伊川が大きく迂回する巖岩の崎は大難所で宝暦八年嶺牛和尚によつてこの崎の山中腹に新道が開拓されている。ここに道供養碑があつた。



アイオン台風の被害にあつて一時は放棄されていたが、最近川井村教育委員会などの手で現地に保存措置が講ぜられた。

古田駅所跡は全く不明である。古田から新里村腹帯間は難所で、特に西家三ツ石の閉伊川狭窄部の往來は難かしく北側の山頂を越える。道中記によれば、「二曲り」と呼ばれる別のルートがあつたほどである。この区間の旧道は残っている。

三、新里村

腹帯町場は今も江戸時代の酒場の面影が町並に残っている。川井村古田地内から十二曲り山越え道で上の台を通る旧道は良く残っている。一方、新道の古田から水神経由の国道一〇六号線上の道筋は全く不詳であつた。

町場はずれにある八幡社前には古碑が相当数建置されている。一部道路改修等の場合に移設されたものもあるという。

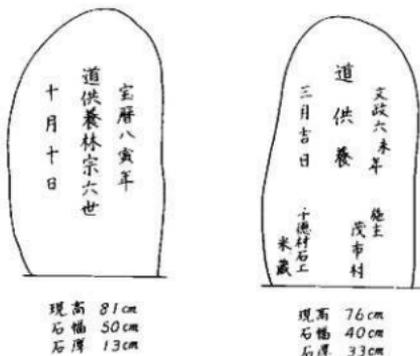
町場部落を過ぎて正面に山城路(「腹帯筋」という)が望まれる。この台地の山麓を街道が迂回しているが、かつてはこの場所に腹帯一里塚があつたと伝えられるが道路工事で撤去されたという。またこの付近に応永三年記録の古碑(新里村教育委員会資料による)。基があつた。しかし現在この碑は閉山下事によつて約一〇〇m程南の方に移設されていた。

街道はこれから先、東方の大洞付近から墓地・塚立間は閉伊川に沿つてあるため、明治期の道路改良拡張工事によつて原状は破壊されている。

なお、腹帯の佐々木吉隣家(大字腹帯・地割一九)は旧腹帯村野入家で屋敷(若干改修されている)が残っている。当家には街道普請関係の古文書が保存されている。

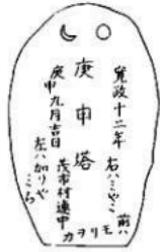
一災地内に道供養碑がある。昭和二十七年頃現在地に移された。ここまでの区間は街道の形跡は失なわれている。

茂市字蓮立地内に西国願礼塔、文化二年三月十日、頼上田山崎市右衛門



高幅厚
81cm
50cm
13cm
現石

高幅厚
76cm
40cm
33cm
現石



高幅厚
116cm
66cm
30cm
現石

と記録の供養碑があつて、總高八六〇ほどの小さな碑だが道標になつていて、「右ハカリヤ」と刻字されている。左側は作場に至る小道があるがこれについては記録がなく一方の本道筋だけを記録した珍らしい道標である。この地内には若干ながら旧道が残つている。

因鉄山田線茂市駅は岩泉線の分岐駅である。この付近は刈原川が閉伊川と合流する落合にひらけた町である。通称町と呼んでいるところで、この地に

は新里村役場をはじめ主な施設があり村の中心的位置で、岩泉方面へのルート起点でもあり商工業も盛んで、新出村資料館もここにある。

宮古街道は現在の閉伊川の落合から約四〇〇mほど上流に橋があつて、この茂市橋をわたつた地点子日向の丁字路に道標があつた。

高さ一六〇、最大幅六六〇ほどの庚申塔である。碑文は

この刈原みちは和井内、押角を経て岩泉方面に伸びる主要道である。なお、この上流約二、〇〇〇mほどの下刈原には文政六年藤田武兵衛によって開闢された新街道があつてこのルートは残っている。東側の山合いを經由し高取山を迂回する往還であつた。

さて、茂市橋を渡つて日向の道標を過ぎ大長根丘陵の中腹部を約七〇〇m以上に亘つて旧道が長く保存されている。道幅約・五・m程の幅員で、途中、丁度中頃に「茶屋場」という往來の人馬が憩つた休憩所跡の平坦地が残っている。

この先き字大平の通称線の穴地域から毎日口までは閉伊川が発達した状態で山にせまり、断崖を構成させ、かろうじてへばりつくような状態で国道・〇六分線が閉伊川に沿つて続いている。旧宮古街道はこの国道に一致し、ま

た山の中腹を縦に細々と続いていたらしくに難所であったか明らかである。この龍の穴地点には宝暦八年(1762)牛和崗建立の供養碑が現国道から約二十mほど上の崖端に建立されている。

文面は

「宝暦八年 道供養 林宗六世 五月二日」

碑高〇・七五mである。村教育委員会で環境を整備して保存措置を講じている。

春日駅所の付近は旧道が残っている。当時の村肝入家も判明したが、火災・水害に遇って惜しいことに原状を失っている。

下川原と宮古市花原市間は字大平熊ノ穴付近と同様断崖状で難所であった。

現在国道・〇六号線、国鉄山田線が閉伊川に沿って設置されているがこの間の旧街道は全く消滅している。

下川原作見内沢は宮古市境であるが、ここに道供養碑が建っている。



高さ約一m、幅〇・五四mほどのものである。

なお宮古市教育委員会の調査によれば、閉伊川沿いの難所を避けて花原市地内華厳院前から新里村下川原に達する山を迂回するルートがある旨、調査報告されている。この点新里村側では未確認である。

又、新里村地内の街道に所在した馬鞍所跡・里塚遺跡については今回の

調査では全く確認出来なかった。

四、宮古市

新里村下川原と宮古市花原市間の閉伊川北岸沿いのルートは難所であったことは前述した。田村忠博氏(宮古市史編纂委員)によれば、新里村下川原地内で閉伊川を南岸に(牛伏渡し場という)渡渉して中洲づたいに宮古市牛伏部落に至り、更に進んで根城館山の中腹を閉伊川沿いに下り老木部落に到達するのが宮古街道の本道であるとされている。

このことは宮古代官所絵図によっても明らかであるが、現在の河川敷幅は約三〇〇m、内水流部分は二〇―三〇mで、現地踏査の結果では度々重なる洪水による河道の変動、流域の変化が激しい場所、従って陸路・水路もその度ごとに改修されたと伝えられ、実線として記録することは不可能であった。

安永年中、宮古代官所絵図によると、花原市川原に、里塚が、対、街道筋を離れた場所に注記されている。河道の変化によって街道が改変された証左であろう。

また田村氏によれば牛伏―花原市間、それに花原市川原と根城館下の川原に至る渡渉連絡の道筋がある。また牛伏―根城川岸間閉伊川の南岸づたいに下る道筋もあったと報告されている。以上のように当該区間の街道の本ルートについては種々の情報があって判断出来兼ねた。尤も藩の公式を眼所定目では春日―根城―田鎖として閉伊川を渉って下徳に至るのが本ルートであるが、前掲「宮古街道図巻二」宮古街道出来栄之図」によつて見ると、閉伊川の北側(左岸)にルートがあつて、下川原―花原市間には華厳院前の字草鞍前から浜山道及びその南側の尾根伝いの「西街道」と地元氏が称している道筋が明記されている。即ち、江戸後期の文政期以降は古来の根城―老木―田鎖

經由のルートに変わってこの花原市轄出の宮古街道新ルートが主要道として利用されたことがわかる。現在この道筋は割合長く残っている。

牛伏部落から老木間の街道は前記のとおり余り判然としなが、洪水によって今は移転して人家のない老木宿駅跡には道筋が残っている。道幅は約5m、街道両側に屋敷地割の跡が読みとれる状態でも道筋が残っている。

老木：三地割一四番地内梅沢義男宅は古米牛伏茶屋と呼ばれて、旅人特に各地馬市往来の人々の溜り場であったと伝えられている。洪水被害で現在は移転したがその跡は残っている。

街道筋に所在する中世閉伊氏の重要拠点であった根城館跡（宮古市指定史跡）はほぼ完全な姿でよく残っている。

老木部落から長沢に至る道を分岐して本道は山越え道で出鎮に至る。この山越えルート約一・二kmの区間は非常に良く原状が保存されている。山道の途中、左手奥には閉伊七社の一つで、もと老木明神と称した閉伊輪基の陪、広沢平馬嶽忠連を祀り、老木館の館神とする（田村忠博氏資料）田嶺神社社殿が残っている。

田嶺部落から千穂に至る閉伊川渡し場跡は川岸の道筋が小道となつて約3m前後の道幅で部分的に残っている。千穂川沿岸に茶屋場の地名がある。

千穂地内は宮古市のベッドタウン化によつて都市化が進み、宅地造成など開発行為で、街道は善勝寺前から千穂の町、宿駅制札場跡の付近の街道はたどれるが他は余り残っていない。しかし、中世閉伊氏の主城であった千穂館跡（宮古市指定史跡）は良く保護されており、その南麓に添つて道筋が残っている。

長根寺門前の道は雲馬黒森権現社（現黒森神社）に至る参道であるが、古米、信仰の道として知られているところである。

宮古街道はいよいよ宮古市街地に入る。館合地内で現在国道、〇六分線と一致して再び分岐し、街道は北上して和見地内で山口川をわかつて、整備され

た新興住宅街の中を東進してこの平坦地を横町入口の神明堂前に至る。この神明堂前跡は宮古町の出入口である。現在は地形上最も撤去されて消

分防分所となつており雛形であった宮の街道も立派な繁華街の中になつて形跡は全くない。

この先の街道を横町通りという。元禄五年時で約四〇軒、途中、南側に黒山通、新町通を分岐し本町通丁字路に達する。ここが浜街道との合致点である。この場所は制札場跡でもある。元禄五年「御町屋敷表目改帳」（宮古伊香家文書）によれば九兵衛屋敷制札場とある。現在は商店になつている。

武進すれば北浜街道筋の常安寺門前を通つて崎山、小本、田老へと北閉伊野出街道となる。この横町角の場所でも本町通となつて南下する閉伊街道は、御水上町（現在向町）橋詰まで約一・六m、創設当初の道幅は五・一五m、

前掲「御町屋敷表目改帳」伊香家文書によると両側に三十九軒の屋敷地が記録されている。現在では本町通中程の東側に江戸後期において二階蔵の豪商という「東屋」の屋敷が残っているが他は大半近代化された町並となつている。

宮古、里塚跡

宮古側から盛岡城下への道筋を二盛岡街道（二閉伊路程図）宮古代官所管内図、盛岡市中央公民館蔵本」と呼ぶ。宮古街道の終点であり、盛岡街道の起点、そして、浜街道一里塚基点がこの御水上町所在の一里塚である。前掲の元禄五年「御町屋敷表目改帳」にその所在地が明記されている。これによると、本町通から南進して山口川に架された御水上町橋を渡り、この橋

詰の西側、作之厨屋敷（現向町七七番取庄商店地）間口十七間の伝馬屋敷に、一里塚があり、この西塚の頂部には樅木が植栽されていた。東塚は同じく橋詰三五郎屋敷（現向町六三九松崎店大下津宅）間口九間の御伝馬屋敷内に所在した。塚頂部に樅木があつたと記されている。

この一里塚については、『宮古由米記(南部叢書第一卷)』に、

一、寛永十八年從藤岡被仰付。付、三閉伊の道法相改七里塚築立申候様ニ被仰付候。依之小元助兵衛・舟越新左衛門兩人、閉伊道のり相改四拾式丁を志里と定め七里詰の塚を築立申候。宮古御水主丁の橋の左行に榎木寛永廿年に植

元禄五年記事とこの文付とは、致するものと考えらる。

当該地区は現在宮古市内の中心部商店街であり、開発によって山口川も埋設された地下水路となっており全く形跡をとどめていない。

御水主町橋詰山口川の下流約二〇mほどの北側の山手高台に御飯屋、宮古通代官所及び藩の御蔵があった。現在宮古市役所分庁舎及び中央公民館の施設が設置されている。



第4図 黒田村、宮古村農園園部分 平成5年(1993年)「宮古町史編纂部改訂」
復元(黒田忠博氏「宮古のあゆみ」より)

五、沿道に残る主な文化財

宮古街道の沿道に相当数の歴史的な文化遺跡、交通関係の記念物、特に道供養碑・道標とさまざまな供養碑があった。また山緒ある社寺堂宇が残っていた。その主なものについて所在を列記する。

一、盛岡市

○水泉寺 大慈寺町

曹洞宗。天正二年中野村に志和源勝寺九世天室清狀和尚開創と伝えられる。のち現在地に移った。境内に宮古街道沿いにあった滝の上観音(白滝観音)の堂宇が安置されている。

○上小路口の古碑 中野一丁目七一―一九

庚申 文政十一年七月吉日

観世音菩薩 天保三年二月吉日

南無阿弥陀仏 天保十五年一月十七日、ほか。

○砂溜の古碑・道標 東山二丁目

庚申・右川日みち、左みやこ道 文化四年正月吉日

山神宮 文政十二年四月吉日

南無阿弥陀仏、右ハみやこしんみち、左ハみやこみち 弘化二年二月十七日、ほか一基あり。

○一反山館 川日仁反田

中世館跡。なお館地内に縄文中後期及び土師期遺跡あり。

○白滝 川日字白滝

景勝地。盛岡十三番札所の七番観音祀地(現在水泉寺遷座)。

○八木田一里塚 新庄上八木田一八地割内

現在道の南側塚が一部壊れた状態で残っている。

○二ノ台の古碑 深沢山山麓ニノ台地内

庚申塔 寛政九年五月十一日

○高畑の一里塚 川目第三地割山林内

南北両塚一対共ほぼ完形で残っている。

史跡盛岡市指定文化財

○大倉崎の一里塚 築川第七地割山林地内

東塚がほぼ完形で残っている。史跡盛岡市指定文化財

○曾利山の一里塚 築川第六地割四の山林内

南塚がほぼ完形に近い状態で残っている。史跡盛岡市指定文化財

○築川馬継所跡 築川字中村

盛岡城下からの第一番目駅所の宿駅が置かれた場所である。建物は大正

十年頃火災にあい焼失し現在水田となっている。

○長洞神社及び古碑 築川第四地割字若林二四

通称判官堂と呼ばれる。境内に古碑がある。

庚申 寛政元年十月八日

山上作太夫(力士) 嘉永四年七月二十四日

ほか一基

○飛鳥口の古碑・道標 築川一地利割飛鳥口

庚申供養・右宮古道 左山道 寛延四年三月七日

庚申供養・右宮古道 左山道 寛政十二年六月九日

庚申塔 慶応元年

○築川の一里塚 築川一地利割山林内

南北両塚一対共完形で残っている。史跡盛岡市指定文化財

二、川井村

○兜神社 大字田代地内

閉伊七社の一つ。菅前総馬が印行されている。

○去石の一里塚跡 大字田代去石

去石元吉、同清右衛門宅裏、現在畑地となっている。

○田代山祇神社 大字田代

社殿三間四面木造葺葺。江戸期獅子頭安永三年在銘跡あり。

○笠石の一里塚跡 大字門馬笠石

国道一〇六号線整備工事によって破壊された。

○上田代官所門馬御役屋跡 大字門馬

田代小学校門馬分校所在地(現在廃校)で、江戸時代この付近の特産で

とくに門馬柁など公役の林産物取扱役屋が設置されていた。

○門馬別当家 大字門馬

早池峰山開慶寺門馬口別当家である。同山松御山守を兼ねて、公役柁

成の生産管理役にあっていた。

○門馬口早池峰新山神社 大字門馬

本殿二間四面、拝殿一間五間木造建築 大正一五年再建。

○機巻一里塚跡 大字川内

国道一〇六号線で破壊され原状をとどめていない。

○鞭牛和尚道供養塔 大字川内字鬼米内

宝暦八年五月十五日

○川内鐘跡 大字川内

山城。中世閉伊家松猪符氏の居館と言い伝えられる。現状は山林、一部畑地となっている。

○道供養 大字箱石字岡村

林宗六世 宝曆九年七月一日

○川井八幡神社（川井明神）Ⅱ大字川井

社殿三間五間拜殿二間四面、閉伊七社の一つ。

○道供養Ⅱ大字川井字下川井

橋野林宗六世 宝曆八年四月八日

三、新里村

○八幡神社前の古碑Ⅱ

念仏塔 文政二年十一月吉日

西国順礼塔 文政三年六月吉日

金毘羅塔 文政七年四月十日

ほかに念仏供養・馬頭観世音・水神・山神等江戸末期の供養塔あり。

○腹帯館跡Ⅱ大字腹帯・地割字館

平山城で形状を良好に保っている。現状は山林となっている。

○腹帯の古碑Ⅱ大字腹帯・地割字館

応永三年在銘、新里村最古の古碑。宮古街道筋にあつたが、開田のため約五〇m移転してある。

○腹帯村肝入屋敷Ⅱ大字腹帯

屋敷構えは同様式であるが改築された建物である。宮古街道普請関係文書その他が保存されている。

○茂市の古碑Ⅱ大字茂市六地割字峯地平

念仏供養塔、天保七年八月一日

その他数基あり、その中にはアイオン台風により流失したもの、また河川改修によって現在地に移転保存されたものがある。

○鞭牛和尚道供養Ⅱ大字茂市第六地割字峯地平

宝曆八年十月十日

○道供養Ⅱ文政六年二月吉日

この二基共、道普請及びアイオン台風の水害で流失したが、その後川の中から発見されて現在地に祀られたもの。

○廻立の古碑群Ⅱ大字茂市五地割廻立

萬歳等碑

念弥陀仏供養 延享五年八月一日

地藏尊 文政十年十月吉日

その他数基がある。

○道標Ⅱ大字茂市九地割廻立

西国順礼塔 右ハもりおか 文化十二年二月十日

○茂市家文書Ⅱ大字茂市二地割日向

交通史関係文書御入伝馬証文及び道橋普請文書などがある。享保年間。

○日向の古碑Ⅱ大字茂市二地割日向

金毘羅大権現 天保五年九月二十八日

百萬遍供養塔 天保五年九月二十八日

念仏供養塔 嘉永六年三月十六日

庚申塔 万延元年秋吉日

○道標Ⅱ大字茂市二地割日向

庚申塔、右ハみやこ、左ハかりやみち、前はモリオカ 庚申九月吉日茂市村連中

○旧道及び茶屋場跡Ⅱ大字茂市

宮古街道筋休屋跡で、この付近の往還道筋の保存は良好である。

○道供養碑Ⅱ大字藤目一地割大平

林宗六世 宝曆八年五月二日

○藤目村肝入屋敷跡Ⅱ大字藤目二地割柴野

伊藤喜代治家。現在改造された状態にある。

○肝入屋敷跡 大字磐目四地割地ノ神

山口進家。大正年中の火災で焼失した。

○上野の古碑群 大字磐目五地割上野

庚申供養塔 寛政十年十一月一日

庚申供養塔 文化元年四月一日

庚申塔 慶応二年二月一日

○積山領代官屋敷 大字磐目五地割上野

建物に寛政四年建築であるが改築著しい。同家に道路貫通関係等の古文書を所蔵す。

○八坂神社の古碑 Ⅱ

八坂神社は元和九年の創建と伝えられる。境内に

供養塔 元禄五年十月吉日

ほか念仏供養・庚申供養塔など六基ほど所在す。

○榊細工・岡工具類

古米新里村の銘産として知られた榊皮細工道具類一式である。刈塚岡夫家に保存されている。現在製造継承者は村内には残っていない。

四、宮古市

○磐目・牛伏渡し場跡 磐目下川原

旧宮古街道渡舟場跡

○大立石神社 Ⅱ牛伏

狗養森山の聖宮

○牛伏の古碑 Ⅱ牛伏大立石神社境内

古碑はもと牛伏部落入口に所在したが、道路工事で現在右の場所に移転された。

庚申塔 元文五年十月十六日

西国巡礼塔 享保二年二月吉日

この外、水神・山ノ神・庚申・地藏尊等の供養礎数基あり。

○華嚴院 花原市字畑ノ下ノ

曹洞宗。もと天台宗で、延徳元年遠州掛川の香林寺四世却外長律師が再建すという。大正七年焼失して資料は殆んど焼失したが、岩手県内に華嚴院を本寺とする寺院が多くあり、由緒の一端を知ることが出来る。門前に旧宮古街道の往還があり、供養塔が多数ある。

○花原市・根城渡し場跡 花原市川原道

河道の変遷の多い閉伊川筋の代表的渡し場跡の遺跡である。

○根城の古碑 Ⅱ根城

宮古街道の根城筋と牛伏道の分岐点に所在する。

西国順礼塔 文政二年四月十七日

馬頭観世音 文政四年二月十日

庚申塔 天保十四年七月十日

○根城高札場跡 Ⅱ大字老木字根城

閉伊街道の宿場入口から分れ、部落入口の位置にあった。

○根城跡 Ⅱ字根城筋

中世城館跡。山城。宮古市指定史跡

○根城宿駅跡 Ⅱ大字老木

第十五地割11番から25番まで、十六区第十六地割13番から29番まで、17区、旧宮古街道をはさんで両側に整然と屋敷割が区割されている。現在家屋は移転して畑地となつていり。

○老木愛宕神社 Ⅱ大字老木

老木部落の鎮守。祭神火噴雲之神。

○老木の古碑 Ⅱ大字老木字老木

西国順礼塔 文化九年二月吉日

念仏供養塔 文化九年三月 日

この外、安永六年二月銘銘地蔵尊、体がならんで安置されている。

○田鎖神社 田鎖字三合並

開伊七社の一つ。旧村社、通称は老木明神といわれ、開伊頼基の臣広沢平馬忠連を祀ると伝えている。

○田鎖船一

中世館跡、山城。天正一〇年諸城被劫令によって廃され、佐々木十郎左衛門持分と記されている。

○田鎖・千徳渡し場跡 千徳川原

川原道は小道となつて一部残っている。

○善勝寺参道の古碑 千徳字神田沢 一〇

念仏供養 寛政五年十一月 日

念仏供養 寛政五年十一月 日

西国願札跡 寛政十二年正月十七日

念仏供養塔 享和二年九月大吉日

この外、天照皇大神宮・西国三十三所、亀橋大明神・卯子西大明神、山神・水神、庚申塔等の供養碑あり。

木彫釈迦二尊像 江戸期 宮古市指定文化財

善勝寺は室町末期の創建と伝えられるが諸堂山門共昭和五十年以後の新建築。

「邦内郷村志」に「仙台明沢永徳寺末寺、報恩寺支配寺領、石椋庭家(家老)寄附之」とある。

○千徳城跡 千徳字町

中世館跡。千徳氏居城跡で、標高八〇mの頂部本丸跡を中心にヒトデ状に二の郭・四郭などをもつ要害で、保存は良好である。

○黒森神社の獅子頭 山日字田ノ神

上三頭 宮古市指定文化財(内二件は県指定文化財)

○長根寺門前の古碑 千徳 地割字長根十四番地

幻生庵祇園古塚 安永六年八月

宮古市指定史跡(佛入吉灯下祇園)

・家敷結塚句碑

○長根寺の阿弥陀如来像・応永銘木像 千徳 地割字長根 四

宮古市指定文化財

○近内の製鉄遺跡 近内字日向

慶応元年一明治元年まで盛岡藩による建設地遺跡。

○水相の一石一石碑 一箇合

岩手県指定文化財「史跡」

「五部大経 一石一文字 冥公成之 水相第一」と四行に刻む。高六、六四

裡、巾一、八五裡、厚一、二裡。花崗岩の自然石。

○神明前外形跡 横町神明堂前

現在は開発によって山状をとどめない。

○宮古町高札場跡 沢口一六

宮古街道が浜街道と合致する交通の要衝に位置している。現在は橋店街となり完全に破壊され、跡をとどめていない。

○本町通り 東屋 本町通

本町通は道幅五・一五m、宮古を代表する町並で主要商家が軒を並べていたところである。東屋は江戸後期以来続いた豪商店構え、建物が完全に昔のままの姿を残している。

○宮古・里塚跡 向町七番・六二番

宮古街道・浜街道に共用される「宮古由来記」の宮古・里塚元標である。現在は商店街となっている。

○宮古代官所跡 御蔵跡 本町一三二

○宮古湊・船着場跡一本町
現宮古市役所分室・中央公民館所在地である。遺跡は消滅した。

○閉伊川河口が濤として活用されたのは室町末期とされる。江戸初期には山口川に架せられた御水主町橋際まで舟着場であったが、その後中洲の発達によって次第に河口は下流に下り、これに伴って七がり岩（現宮古電話局付近）までが主な船着場であった。現在は埋立地となって全く昔日の面影はない。

六、沿道に沿った公開施設

・新里村資料館―新里村大字茂市三地割岩角地所在（国鉄山田線茂市駅前）
設置 昭和五十四年六月一日

建物・規模 鉄筋コンクリート構造・階建、建坪二〇・〇㎡、二階坪

二二〇・一一㎡

管理 新里村教育委員会

収蔵展示資料

(一) 村内各地出土考古学関係資料及び化石動物標本類

(二) 村内生態動物標本類

(三) 村の生活、民俗民芸関係資料

特に金山開発資料・閉伊川和紙漉と楯皮細工製品・用具など地元産に関する貴重な資料を収蔵している。

四 郷土史関係文書資料

五 美術工芸関係資料

この外、特にこの資料館を特色づけるものとして、当村ゆかりの人々、作曲家鳥取春陽（明治三十三年生）昭和七年没）関係の伝記資料及び作品資料

料など約七〇〇点を収蔵する。また、宝暦年中、村の生活道路として最も重要な道であった宮古街道開発の恩人、牧庵兼牛和尚（宝永七年生）天明二年没）の業績を物語る遺品・伝記資料を収集保存し公開している。

付記

宮古街道の調査にあたって、関係資料の収集並びに現地調査について、表記例言のとよりの調査員各位のほか、左の方々に御指導とご協力をいただいた。特記して厚く感謝の意を表します。

岩手大学名誉教授 坂橋 源

盛岡市中央公民館

同 主事 今松 伸一

盛岡市文化財調査員 菊池 義尚

同 小野寺 時美

盛岡市薬川曾利田 川村 保人

同 飛鳥口 吉田 善太郎

宮古市 市史編纂委員 田村 忠博

南



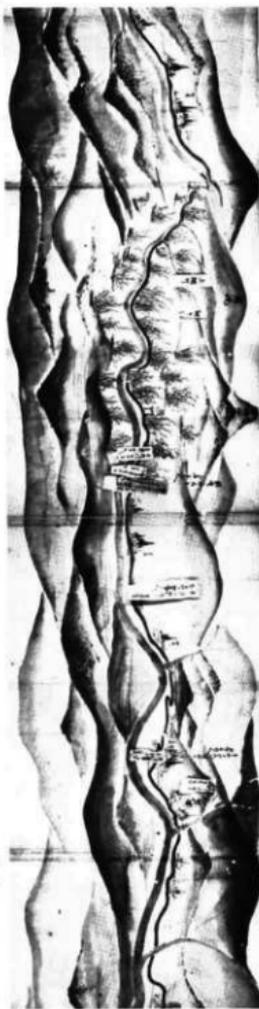
1 宮古街道(新里村茂市一川井村川井)図

宮古代官所管内絵図
(江戸中期)
盛岡市中央公民館蔵



2 筑古河河川図(部分)

上段 藤岡下～川目間
 中段 道川一區界～田代付近
 下段 茂市～葛目間
 筑古河河川図縮刷





4 永泉寺 (盛岡大慈寺町所在)



6 宮古新道分岐点・道標 (盛岡川目砂溜地内)



8 大倉峠下一里塚 (盛岡藪川大倉地内所在)



3 宮古街道分岐点 直進は遠野街道、左折は宮古街道
(盛岡鈍屋町十文字)



5 旧上小路足軽相丁通 (盛岡茶畑地内)



7 八木田一里塚東塚 (盛岡八木田地内所在)

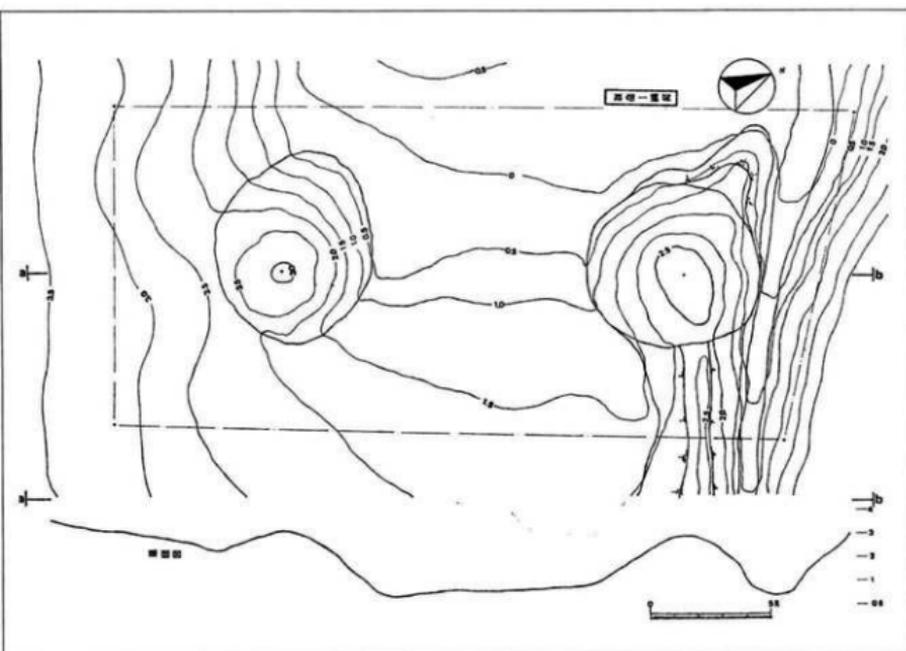


9 大難所・大倉峠の道 下方に茶屋・大倉家の
曲り家が望まれる。
(盛岡・藪川大倉付近)

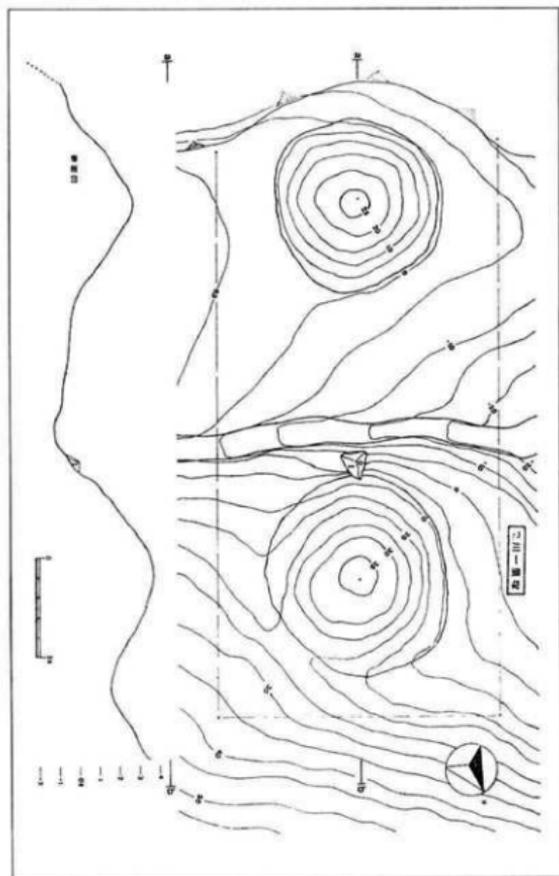


10高畑一里塚・同実測図

(盛岡川目塚の沢所在)



11道川一里塚・向水洲池





13宮古街道・曾利田一里塚付近 (盛岡藩川6-4地内)



12曾利田一里塚 (盛岡藩川6-4地内)



15道標・庚申供養塔 寛延4年3月7日、寛政12年6月9日、慶応元年
(盛岡藩川飛鳥口)



14碓川馬継所跡 (盛川藩川地内)



17宮古街道 中央谷底部分 頂部が川井村境 (盛岡藩川沢地内)



16宮古街道 峡谷部を通過していた。(盛岡藩川地内)



18 宮古街道遠景 光明神丘頂上から南方向を俯瞰す



19 去石一里塚跡 (川井田代地内)



21 宮古街道・田代部落の宿屋跡 (川井田代地内)



20 光明神社社殿 (川井田代地内)



23 笠石一里塚跡 (川井門馬地内)



22 旧早池峯山門馬御坂口 (川井門馬地内)



24岩泉道分岐点 (川井地内)



26鞍牛和尚道供養碑 道供養塔横野林宗六世 宝暦8年5月15日
(川内湖の上地内所在)



28鞍牛和尚道供養碑 道供養林宗六世 宝暦9年7月1日
(箱石・岡村地内所在)



30真忠館(川井館)跡から街道を望む (川井地内)



25宮古街道(弁牛道) (川井地内)



27伝承「箱石」 (箱石地内所在)



29川井八幡神社(川井明神) (川井所在)



31肝入文通史文書 通路普請黄金文書 文政7年9月15日付



伝馬段文書 宝暦7年10月12日付
佐々木吉隣家所蔵(複製)



34道標・西國順禮塔 文化13年3月10日
(茂市5地割通立地内所在)



33道標・庚申塔 寛政12年9月吉日
(茂市2地割日向地内所在)



32古碑 延永第3丙子7月11日
(複製1地割隔所在)



同上拓本





36機織御前(比咩大神)と古碑 (腹帯3地割上の台地内)



35宮古街道 腹帯上の舌付近



38鞍牛和尚道供養碑
道供養橋野林宗六世
宝暦8年4月8日
(川井・老木の碑)



37宮古街道 (腹帯1地割7地内)



40鞍牛碑 宝暦8年10月10日
(茂市6地割段地平所在)



39道供養碑 文政6年3月吉日(茂市6地割段地平所在)



42宮古街道 暮目・大平付近



41宮古街道 小国・遠野道分岐点付近



44八幡神社古碑 (版帯第1地割箇所在)



43街道筋古碑 (版帯2地割日向)



46轆牛碑 道供業林宗六世 宝暦8年5月3日
(暮目・大平地内)



45宮古街道 茶屋場跡付近から麓の六方向への道



48種細工加工用具一式 刈屋国夫所蔵



47村立「新里村資料館」 (茂市・岸角地所在)



50八坂神社と古碑 (幕目地内所在)



49鎌牛和尚遺品 宮古街道開きく工具類 (同資料館保管)



53西国順禮塔 文政10年6月吉日 (幕目所在)



51幕目・肝入屋敷 (山口家)



52宮古街道 (幕目地内)



55田鎮館跡 (宮古田鎮地内)



54槻城館跡 (宮古老木地内)



57盛岡藩設置「近内製鉄場跡」 (宮古近内地内)



56宮古街道 老木部落付近



59黒森神社本殿



58宮古街道 (田鎖部落地内)



61黒森神社「獅子頭」(岩手県指定文化財)



60千徳館跡 東方から望む



62華嚴院 (宮古花原市地内)



64宮古横町通 浜街道分岐点高礼場跡から西方を望む



63本町通 正面は高礼場跡左は盛岡方向、右は浜街道



66商家「東屋」 (宮古本町通)



65常安寺 (宮古市内)



67宮古・浜街道絵図部分 (幕末期)



69宮古通代官所跡 (現宮古市役所分庁舎)



68宮古一里塚旧跡



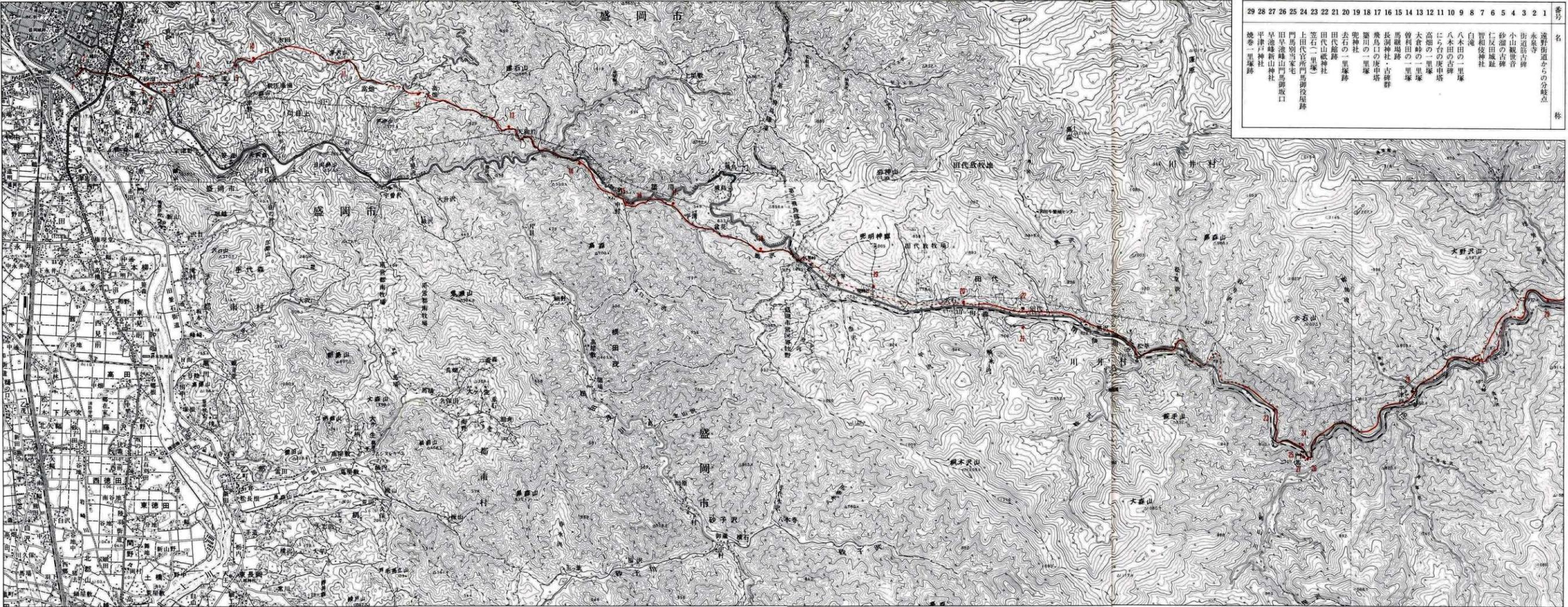
70-1 宮古・盛岡城下間「伝馬駄賃帳」箱石馬籠所(部分)



70-2 同左 田鎖馬籠所(部分)

街道筋の文化財「宮古街道」

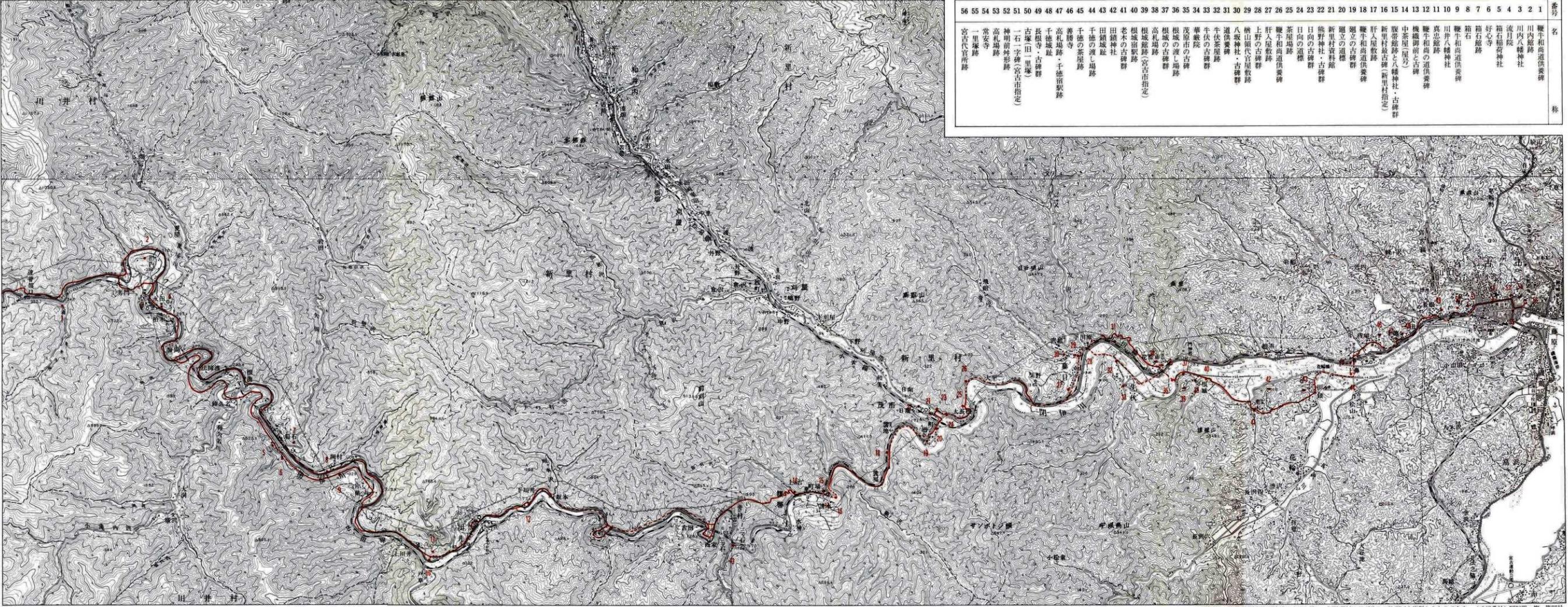
番号	名称
29	遠野街道からの分岐点
28	永泉寺
27	街道古碑
26	小山観世音
25	砂瀨の古碑
24	仁反田城址
23	菅沼俊神社
22	白滝
21	八木田の古碑
20	八木田の古碑
19	八木田の古碑
18	高畑の一里塚
17	大倉崎の一里塚
16	曾田の一里塚
15	馬籠跡
14	長瀬神社・古碓群
13	飛鳥口の床中塔
12	鑿川の一里塚
11	兜神社
10	去石の一里塚跡
9	田代山神社
8	田代山神社
7	笠石(一里塚)
6	上田代官所門馬跡役屋跡
5	門馬跡当家宅
4	旧早達峰山門馬跡坂口
3	早達峰山神社
2	平津戸神社
1	焼巻一里塚跡



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭66 雑、第77号

街道筋の文化財「宮古街道」

番号	名	種
56	鞭牛和道供養碑	
55	川内路跡	
54	川内権神社	
53	流月院	
52	箱石権神社	
51	好心寺	
50	箱石路跡	
49	箱石	
48	川内権神社	
47	真忠霊碑	
46	鞭牛和道の進供養碑	
45	機織師前と古碑	
44	中茶屋(屋号)	
43	腹帯路跡と八幡神社・古碑群	
42	新里村古碑(新里村指定)	
41	肝入屋敷跡	
40	独立の古碑群	
39	新里村資料館	
38	能野神社・古碑群	
37	日向の古碑群	
36	日向の道標	
35	茶屋場跡	
34	鞭牛和道供養碑	
33	肝入屋敷跡	
32	上野の古碑群	
31	横山領代官屋敷跡	
30	八坂神社・古碑群	
29	道供養碑	
28	牛伏茶屋跡	
27	牛伏の古碑群	
26	華厳院	
25	茂原市の古碑	
24	根城の清馬跡	
23	根城の古碑群	
22	高札場跡	
21	根城路跡(宮古市指定)	
20	根城宿駅跡	
19	老木の古碑群	
18	田領神社	
17	田領城址	
16	千徳の滝・馬跡	
15	千徳の茶屋跡	
14	善勝寺	
13	高札場跡	
12	千徳城址	
11	長根寺・古碑群	
10	古塚田一里塚	
9	一石・古碑(宮古市指定)	
8	神明前跡	
7	高札場跡	
6	常安寺	
5	一里塚跡	
4	宮古代官跡	
3		
2		
1		



この地図は、建設省(国土院)の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭56根 報、第77号

岩手県文化財調査報告書 第六十五集

宮古街道

昭和五十六年三月三十一日発行

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会

印刷 株式会社鹿谷印刷